



3月11日後の事ども

牧師 中原真澄

人の認識というものは結局、自分の個人的体験の枠によって決まってしまう、その外に広げていくことは、ただに「情報」を得るだけでは難しい・・・そんなことを感じたり、考えたりしています。ここ数ヶ月の様々な出会いと働きと、そこで触発された事どもを忘れないようにと、一つの備忘録的に記したいと思います。

3月11日のあの瞬間を思い起すと、牧師館リビングのソファに座って新聞を読んでいた私は「震度4かな・・・5にいくかな・・・それにしても、長いなあ～～」とソファの上でジローを落ち着かせていたことを思い出します。震源地はどの程度の揺れか・・・とテレビをつけると、国会中継場面が映ったと思った瞬間、真っ黒になりました。やがて揺れが収まり、牧師館は何ともなかった(テレビの上のダルマの置物さえ落ちなかった)ので、会堂の様子を見に行きますと、これまた普段と全く変わらない。「大したことなくて良かった」とラヂオをつけると、津波警報がやがて大津波警報に変わり、そのうち、仙台沿岸部は可成りの被害が出ているらしい・・・そんなニュースが伝わってきました。岩手沿岸部もタイヘンだろうな・・・と思いつつ、夕刻、雪が舞い出した中にジローと散歩に出ると、信号が全て止まり、ノロノロ渋滞する車で道路が溢れている・・・これは余程ヒドイかも知れないと、漸く思い至りました。

翌朝、盛岡でも避難所が設けられ、給水車が出ている・・・そうニュースで聞き、これはタイヘン・・・と、先ず、佐藤倫子さんのお宅へ(安否確認に出かけたのが翌朝・・・認識の甘さがどれ程だったか、お分かりでしょう!)。昨夜から知人が一緒に泊まってくれている・・・と、お元気そうな様子で一安心。近くのマンション7階に鶴丹谷さん(バプテスト教会員・朝樺会のお仲間)宅を経由して、中条先生宅へ。固定電話に出ない(停電時の設定変更をしてなかった)ので、近くの小学校に避難されてるのか・・・と心配したのですが、ご在宅。断水で、暖房もないということで、牧師館へお誘いする。

午後、パンなどを買いにスーパーへ。長い列で待つ間に店に電気がつき、2時間がかりの買い物を済

ませて牧師館に帰ると、こちらも通電。テレビを点けると、あの恐ろしい情景が目に飛び込んできました。想像を超える震災であったことに漸く気づいたのです。皆さんも同様だったかも知れませんが、まして、自分の家に何の被害もなかった私には、初めから想像の広がりを持ちようがなかったのだろうと思います。

翌週の火曜(15日)、濱塚さんが来訪。盛岡YMCAの若いスタッフが「こんな状況で何もしないのでは、YMCAじゃない」と言っているが、少ないスタッフで日常プログラムをこなしている盛岡YMCAには余裕がない。どうしたらイイか・・・という相談でした。「それはYMCAとして当然な思いだよ。いいよ、やっちゃったらイイ」というのが私の考えでした。「やってしまえば、日本のYMCAが、世界のYMCAも、ほってはおかないよ。大丈夫、必ず支援してくれるから」。直ぐに、何処が協力先として考えられるか相談しました。その結果はご存知のとおりです。濱塚さんは直ぐに動いて宮古教会に赴き、森分牧師の全面的な協力を得つつ18日スタート。今に至るまで全国の支援を得て継続しています。

私個人は、もう若くないから・・・と自重していましたが、そんな思いとは別に、東京の友人たちが動き始めました。連絡がつくようになって直ぐメールをくれた東京YMCA時代のボランティアで青山学院高等部同窓会の会長をしている友人や、東京で牧会していた時代の友人・蒲田教会の林牧師から連絡と共に物資も送られ、私のメールを見た王子教会の大久保牧師からも支援物資が送られてきました。やがて宮古で自転車がある・・・という情報をYMCAから得、応えたのが青山学院高等部同窓会でした。30台以上の自転車を集め(中には、70代のOGが杉並の自宅から青山まで御自分で漕いできた自転車を置いていって下さったり!),トラック2台で届けてくれました。牧師館はそういう時の中継地点として、大いに活躍しました。また、やがて届いた段ボール箱100箱以上は、会堂の和室が倉庫がわりに、これまた大いに活用されました。他に支援物資を送って下さったのは、昨年暮れと7月に教会を訪

ねてきてくれた佐藤神学生が会員である番町教会から、今も届いています。これらは、教区の他、千葉さん、県社協等を通し、5月以降は私が被災地に直接に届けることもあり、大いに役立つことが出来たと感謝しています。

奥羽教区の動きは、ガソリン不足もあって、当初、鈍かったと言ってよいでしょう。3月28日、延期された地区(教師)会が持たれ、沿岸被災教会に牧師仲間として支援・協力することが決議されました。4月16日、大船渡教会・村谷牧師就任式に出席した際、初めて被災地の酷い状況を目にしました。普段どおりの景色が、ある地点から突然、荒涼とした光景に一変する様子は、世界を鋭い刃物で切断して異次元世界に接ぎ木したような、そんな感覚で目に映りました。そこに暮らしていた人々を思うと、とてもレンズを向けることは出来ませんでした。18日、支援活動の一環として新生釜石教会に赴き、柳谷牧師とは短く歓談しただけでしたが、被害を受けた教会が癒しと回復へ向けて歩み出している姿を目撃でき、ある種の感銘を受けて辞しました。

5月からは、遠野教会の三浦牧師に誘われ、新生釜石教会や大船渡教会を訪れる他、沿岸部で被災した幼稚園、保育園をお訪ねして状況を伺い、その支援を図ることが多くなりました。遊具を全て流された幼稚園・保育園の要望を聞き、ブロックや三輪車、さらにプール等を、青山学院高等部同窓会の助力を得て購入、届ける働きをしました。9日には初めて大槌に行き、その余りの情景に胸が潰れる思いでした。津波で壊され、更に火で焼き尽くされ、黙示録的とも言える光景の中で、ここが祝田さんの家があった筈・・という所を探し出し、奈緒子さんを覚え、また、毎週ここを訪ねては手掛かりを求めているご父君・川村さんの思いを偲び、佇んで祈る他はありませんでした。

同じころ、東京の古い友人が既に3月中旬に始めた“Sixteen Fathers”の働き(福島から宮城に向け、フィリピン女性=花嫁たちの家族を支援するため、リレー式に支援物資を車で運び届ける働き)を知り、岩手の支援を必要とするグループとの連絡を濱塚さん経由で取りつけ、陸前高田の窮状を知りました。及川忠人さんも同様の話だったので、教会としての支援活動を、暫くここで行う提案を役員会に諮りました。6月7日第1回の訪問で、菅原マリフェさん宅(自宅は流され、近くの本家に親戚3世帯が避難)に、ミネラルウォーターやオムツ等を届けました。

更に、お米や衣類、扇風機等の電気製品、ミルクや防虫剤・防臭剤・・・。事態の変化に伴い変わる需要を聞いては、教会の支援献金で購入する他、友人や姉、他教会から送ってもらい、毎週、届けてきました。6月後半は、更に気仙沼のグループにも届けるようになり、長い時は400kmをドライブしました。

実際に被災した方たちの話を聞くと、ただ見ただけは違う情景が心に刻まれていきます。恐怖に怯え逃げ出した自分・・、いつも声をかけてくれた隣人の死・・、握っていたのに手を離し、流されていったあの人の顔・・。涙ながらに語られる言葉は、災害の恐ろしさを語るとともに、人の思いが自然の力に優って、そうした景色を蔽い、色づけていきます。災害の理不尽さと同時に、それでもなお、人の心の優しさ・哀しさが思いの底から紡ぎ出される時、そこに悲しみ・苦しみと共に、美しささえ感じてしまいます。

勿論、これからの歩みを考えると、まだまだ苦難の時は続き、簡単に解決はしないでしょう。大変さはむしろ、これからでありましょう。でも、そんな苦難に負けてしまわない人の強さと美しさも、同時に感じるのです。人がひとり(孤)ではなく、共に生きようとする時、其処には、足し算では終わらない何かが生まれてくる・・そんなことを、支援に携わっている多くの人たちは感じているのだろうと思います。

最後に、宇都宮の友人が最近、福島から避難している方々の支援イベントに参加した時に聞いた言葉を記して、このメモワールの最後とします。福島から宇都宮にきたあるご夫婦の言葉です。「私たちは、目の前の扉を自分で開けなければならないんです!今日、いろいろな救援物資を頂いたけど、頂いたってことは、いつか、お返しをしなければと思うんです。頂くだけではダメなんです・・・。何をお返しできるかわからないけど、たとえば、笑顔であいさつとか・・・。小さなことからでも、何かからスタートしなくては・・・。何かができるはず・・。私は負けたくないんです・・・」。

きっとこのご夫婦は、精一杯に頑張っただけなのでしょう。その力みがあったのかも知れません。でも「目の前の扉を自分で開ける・・それは、他ならない自分なのだ・・!」という強い決意(それは人間としての決意でありましょう)が、本当に尊い言葉として語られています。この言葉は、支援する側・支援される側、どちらにも言えるのではないのでしょうか。私たち一人ひとり、この震災の後に開けなけ

ればならない扉が、目の前にある筈です。誰かが開けるのを待っていては「ダメなんです・・・」という

ご夫婦の言葉は、私たち一人ひとりの言葉である筈です。